

中世前期における房総半島太平洋岸地域の在地勢力―覚書―

野 口 実

はじめに

ここ数年の間、「日本中世社会における宗教者の政治・文化的環境に関する研究」という大きな研究課題を掲げ、具体的には、中世前期における下総国の太平洋岸から香取海（常総内海）周辺、さらに筑波山麓から下野国宇都宮にいたるエリアの文化環境を武士団の存在形態を切り口にして考察している。二〇一九年度の研究成果の論文発表では、鎌倉時代に下総国匝瑳南条庄の地頭をつとめた椎名氏と浄土宗鎮西派の祖となる良忠の関係を取り上げる予定であった。

しかし、その執筆の段階で新型コロナウイルスの世界的流行という前代未聞の事態が発生し、施設利用等の事情や授業形態の変更への対応から、平常の研究活動の実行が不可能となった。そのため、今年度の研究発表は、具体的なテーマを考察した論文ではなく、房総半島太平洋岸地域の在地勢力の存在形態を対象として、些末な内容ながら、研究の過程で明らかにすることのできた様々な点についてのメモを提示する覚書で責をふさがせて頂きたい。

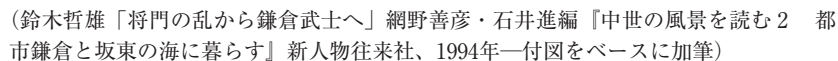
一、古代における征夷戦の前線基地

(一) 下総国匝瑳郡の建郡と物部匝瑳氏の征夷活動

古代における征夷事業において、鹿島・香取両神宮が〈隼人征討における宇佐八幡宮〉に対応するようなイデオロギー的機能を担ったことは論ずるまでもなからう。^① 両神宮の立地地点の内国側直近に位置する下総国匝瑳郡は太平洋に面し、海路で畿内から陸奥に侵攻する中継地点としての機能も合わせて征夷の兵站機能を担っていたようである。古くは『日本書紀』の景行四十年紀に、相模から上総に渡った日本武尊が「玉浦」から蝦夷征討に向かったことが記されるが、『倭名抄』には下総国匝瑳郡に「玉浦郷」が見え、九十九里沿岸に形成されたラグーン（潟湖）による良港が存在していたことが想定されている。^②

『続日本後紀』貞和二年（八三五）三月辛酉（十六日）条には、下総国人で陸奥鎮守將軍に任じていた外従五位下勲六等物部匝瑳連熊猪が宿禰の姓を賜って本貫を平安京の左京二条に移したと、彼の祖先の物部小事連が天皇の命令で坂東に出征して下総国に匝瑳郡を建て、その地名を以て氏と為したということが記されている。小事については五〜六世紀頃の人と考えられるので、建郡ではなく、これは小事が匝瑳国を建て、その国造になったことを伝えたのであろう。^③

その後、この物部匝瑳氏からは弘仁三年（八一二）に外従五位上物部匝瑳連足繼が鎮守將軍（『日本後紀』同年二月己亥（十日）条）、承和元年（八三四）には主殿允で正六位上であった熊猪が外従五位下鎮守將軍に叙任され（『続日本後紀』同年五月己巳（十九日）条）、承和四年（八三七）にも物部匝瑳宿禰末守なる者が鎮守將軍として



所見しており（『続日本後紀』同年四月己丑（二十一日）条）、物部臣瑳氏が本貫を都に移した平安期に至るまで臣瑳郡をベースにして蝦夷征服に従事したことが知られる。

（二）黒麻呂・流藤原氏と上総国藻原・田代庄

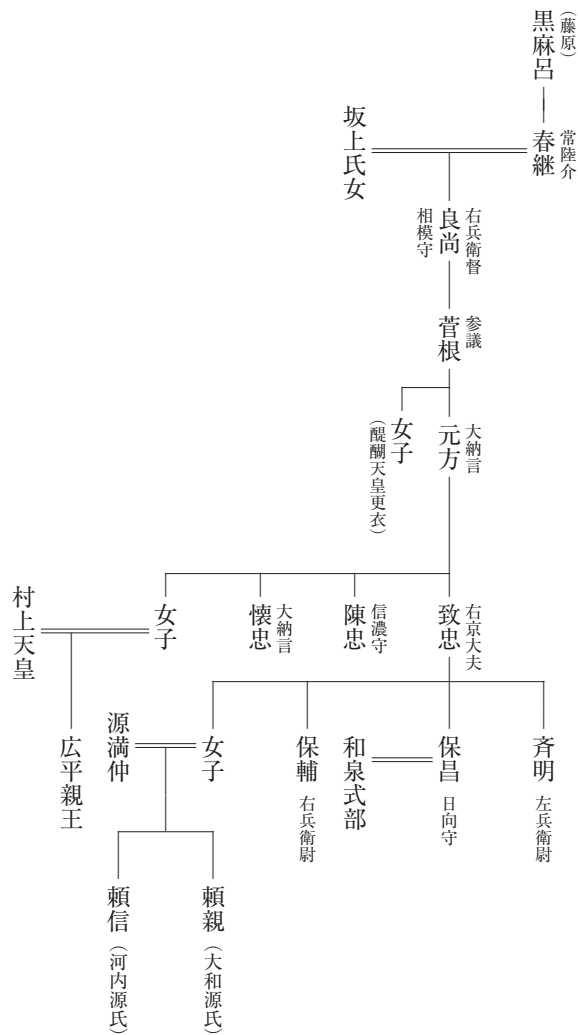
九世紀の東国とりわけ坂東は、奥羽から移配された俘囚や群盗の跳梁跋扈する不安定な地域であり、その対応策として軍事貴族が配置された。また、陸路から水路への交通体系の比重の移行やそれに伴う開発の進行などの社会経済的関係において畿内との関係が緊密化し、婿入りによる子孫の家の形成という条件も相俟って、中央における支配層の一部が活動の場を東国に求める形で王臣貴族層の進出が活発に展開する。

軍事貴族の配置という観点からすると、上総介から守に転じたことを楨杵として上総国の太平洋側の地に藻原庄を墾いた南家藤原氏の黒麻呂の子孫から中央でも活躍した多くの武人貴族が輩出していることは注目に値する。^④

黒麻呂の子の春継は常陸介に任じ、在地の豪族とみられる常陸大目坂上氏の娘を妻として上総に住み、父の代から買得集積した土地を合わせて田代庄（天羽庄）としている。その子良尚は中央に出仕して近衛府の将監から中将に昇り、さらに従四位上右兵衛督兼相模守に至っている。この間、彼は上総権介にも任じており、また寛平二年（八九〇）、彼の子の菅根らが春継の墳墓の地であることを前提に、藻原・田代両庄を興福寺の諸聖衆供料などとして施入していることからみても、この一族が上総に地盤を確保しながら中央での政治的地位の上昇を策していたことがうかがえる。保立道久氏は田代庄が現在の東京湾岸に位置することから、田代庄は旧東海道の相模国三浦半島側からの渡海点であり、太平洋側の藻原庄とともに港湾施設を有していた可能性を指摘している。^⑤

良尚は『三代実録』元慶元年（八七七）三月十日条に「美容姿、好武芸、膂力過人、甚有胆氣」とあって、理想

系図 1 南家黒麻呂流藤原氏とその係累



的な軍事貴族であったようだが、その子の菅根は文章生としてスタートして晩年には参議に到っている。また、その子の元方も文章得業生から大納言にまで進んだ。かくして、この一族はすっかり文官貴族化したように見えるが、『江談抄』によれば平将門の乱のとき、追討使に元方を任ずる議があつたというから、この家系が上総の地盤を保持しながら、軍事的な側面を備え続けていたことがうかがえよう。

この元方の孫にあたるのが、和泉式部の夫で藤原道長の家司として知られる藤原保昌である。『今昔物語集』は彼について「兵ノ家ニテ非ト云ヘドモ」とことわりながらも、弓箭に達し武者的な活動を展開したことを活写している。注目されるのは、彼の兄の左兵衛尉斉明が大江匡衡を襲撃した罪で逮捕されたときに逃れて海賊になり、のちに東国に下ろうとして近江で討たれていることで、やはりこの一族と海上交通との関わりが看取されるのである。同じく『今昔物語集』には、河内源氏の祖として知られる源頼信が、常陸介在任中（一〇一〇年頃）、常陸との国境近くを本拠にして両総地方で大勢力をふるっていた平忠常を攻撃した際、「家ノ伝へ」で知っていた浅瀬を利用したという話が伝えられているが、頼信の母は保昌の姉妹であつたから、この「家ノ伝へ」とは母方からのものだったのであろう。⁽⁶⁾

(三) 坂東平氏と常陸・両総

軍事に優れた王臣貴族の東国下向という点、秀郷流藤原氏の祖となる藤成とともに想起されるのが、上総介平高望の系統、すなわち坂東平氏の展開である。興味深いのは、上総介であつた高望の子息たちが常陸大掾源護の婿となり、その子孫たちが常陸から両総を中心にした南坂東一帯に展開したことである。とくに良兼は下総介に任じていながら、下総国匝瑳郡と国境を隔てる栗山川の対岸に位置する上総国武射郡を本拠としており（『将門記』）、や

はり常陸から上総にいたる太平洋に面したエリアが一体であったことと、その重要性がうかがえるのである。また、良兼の兄弟で将門の父にあたる良持が鎮守府將軍に任じていたことにも注意しておきたい。ちなみに、栗山川は九十九里地方においては最大の河川で、香取市栗源を水源とし、三〇キロほどの流域には沖積平野（中世は沼沢地）が広がる⁽⁸⁾。

将門の乱後、両総地方は良兼の弟にあたる良文の系統（坂東平氏）のテリトリーとなった。先に見た忠常は良文の孫にあたるが、その忠常の子孫は上総・下総に展開したので「両総平氏」と概念化されている⁽⁹⁾。

忠常は長元元年（一〇二八）に反乱を惹起し、上総国夷瀧（夷隅・伊隅）郡の山間部に立て籠もって追討軍に抵抗したが、前述のように、下総と常陸の国境近くにも拠点を有していたようで、そこは「衣河ノ尻ヤガテ海ノ如シ。鹿嶋梶取ノ前ノ渡ノ向ヒ、顔見エヌ程ナリ。而ルニ彼ノ忠恒ガ栖ハ、内海ニ遙ニ入タル向ヒニ有ルナリ」（『今昔物語集』）と伝えられ、近世に編纂された地誌『総業概録』は、その場所を現在の千葉県東庄町大友政所台に比定している。歴史地理学の青山宏夫氏は、この地点が下総台地を越えて樺海と桁沼を結ぶ水上交通路の樺海側の入口に位置することを指摘している⁽¹⁰⁾。氏は、房総半島太平洋岸から常陸川水系（香取海と接続し太平洋に河口を開く）へ、そのほとんどを内陸水路によって移動でき、そのルートは太平洋岸の航路として最大の難所の一つとされる銚子沖を回避し、関東以西と関東以北をつなぐルートとして一定の役割を果たしたと述べるが、忠常はそのルートを押さえる場所に拠点を置いていたことになろう。

注

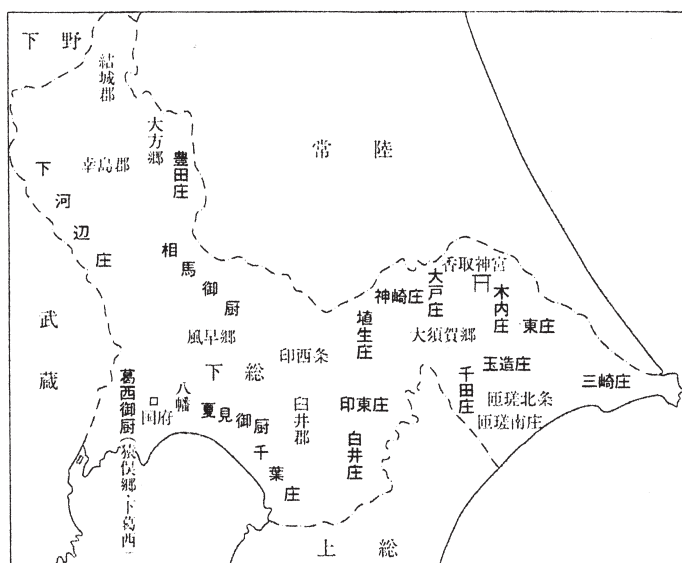
（1）宮井義雄『歴史の中の鹿島と香取』（春秋社、一九八九年）など。

- (2) 川尻秋生「古代東国の外洋交通」(『歴史学研究』第七〇三号、一九九七年)。
- (3) 菱沼勇・梅田義彦『房総の古社』(有峰書店、一九七五年)二二六頁、『日本歴史地名大系第二二巻 千葉県の地名』(平凡社、一九九六年)。
- (4) 拙稿「南家黒麻呂流藤原氏の上総留住と「兵家」化」(『政治経済史学』第三六三号、一九九六年)。
- (5) 保立道久「律令制支配と都鄙交通」(『歴史学研究』第四六八号、一九七九年)。
- (6) 拙著『列島を翔ける平安武士』(吉川弘文館、二〇一七年)。
- (7) 拙著『坂東武士団の成立と発展』(戎光祥出版、二〇一三年、初出は一九八二年)、拙編『小山氏の成立と発展』(戎光祥出版、二〇一六年)。
- (8) 道澤明「房総東部栗山川流域の中世世界——横芝光町の遺跡・集落等の検討から——」(『房総中近世考古』第三号、二〇〇九年)。
- (9) 千葉・上総・上総千葉氏など、両総平氏系武士団の展開とその存在形態については、拙著『坂東武士団の成立と発展』および『中世東国武士団の研究』(高科書店、一九九四年)に収録されている関係論文を参照されたい。
- (10) 青山宏夫「干拓以前の潟湖とその機能 椿海と下総の水上交通試論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一八集、二〇〇四年)。

二. 両総平氏系武士団の展開と下総藤原氏

(一) 物部臣瑳氏から平姓臣瑳氏へ

忠常の乱後、両総地方には在地領主として彼の子孫たちが展開するが、十二世紀に至り、その「両総平氏」から

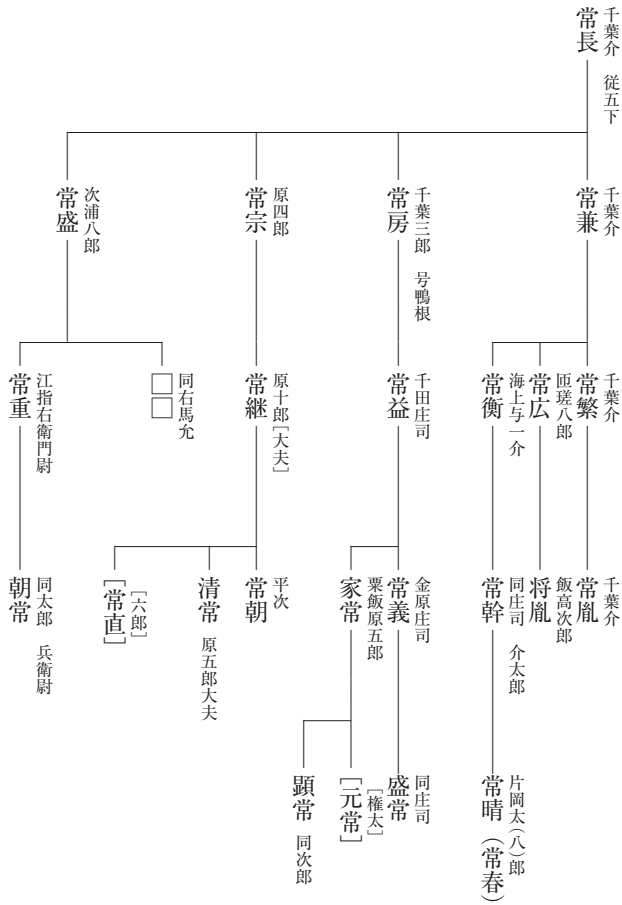


地図2 12世紀末の下総国

「匝瑳」を家名とする武士団が現れる。『千葉大系図』（近世成立）によれば忠常の曾孫にあたる常兼の子常広は匝瑳郡司となつて「匝瑳八郎」と称し、また郡の南部に成立した熊野山領南庄（匝瑳南条庄）の下司職を兼ねたという。系譜的には中世成立の系図と齟齬はなく、匝瑳郡司への補任も蓋然性が高い。一方、匝瑳南条庄の下司職については、摂関家や熊野山の権威を背景に河内源氏の地方展開を進めた源為義が、相模国愛甲庄などと同様にこの地の立荘を仲介し、常広がこれに補された可能性が高い。^①

現在の匝瑳市生尾に鎮座する老尾神社は匝瑳郡一座の式内社であるが、当社の神職に伝えられた文書には「国司千葉常兼ノ舍弟、匝瑳郡司八郎常広の庶孫平朝臣胤久ヲ以テ正治三年辛酉国司千葉胤政命ジテ匝瑳郡司ニ任ズ。因テ其先祖物部匝瑳宿禰ノ跡老尾神社ノ社務大欄宜を兼テヨリ代々氏族ノ党交代シテ匝瑳ノ郡司ト当社ノ社務ヲ兼任ス」^②とあり、常広の系譜的位置を誤り、胤久の存在が確認できないなどの難点はあるが、両総平氏系の匝瑳

系図 2 千田庄・匝瑳北条の両総平氏一族



※『神代本千葉系図』による「」は『源平闘諍録』のみにみえるもの

原・金原は千田庄内の郷名。粟飯原は不明。

次浦常盛の子孫や匠瑳北条飯高郷の飯高氏なども「下総藤原氏」に服属か？

氏が物部臣瑳氏の子孫に婿入りするなどの形で、その地位を継承したことは事実と認めてよいように思われる。

一方、常広の叔父にあたる常房は匝瑳郡内の鴨根郷を名字地としており、その子の常益や弟の常宗・常盛の子孫は、十二世紀に入ってから、鴨根郷を含む一帯に成立した千田庄に含まれる原・金原・次浦の諸郷に分立している。ちなみに、律令制下における匝瑳郡は十二世紀末までに匝瑳北条・同南条(庄)・千田庄・玉造庄などの中世的所領単位に解体していた。⁽³⁾

(二) 為光流藤原氏の下総進出

十二世紀の後半、平家政権との姻戚関係を背景にして千田庄と匝瑳北条に本拠を置いて在地武士団を膝下に置いて地域権力を樹立したのが藤原親政(為光流の下総藤原氏)である。親政は祖父親通、伯父親方が三期にわたって下総守を歴任したことによって得た在地の利権を継承し、摂関家に仕えて「下総大夫」と称された父親盛の遺跡をつぎ、妻が平清盛の姉妹、娘(二条院内侍、親方の女とも)が重盛の妻となつて資盛を生むという好条件を背景に在地に君臨し、匝瑳北条の内山館と千田庄の次浦館を本拠として周辺武士団に従える立場を築いたのである。⁽⁴⁾ちなみに、下総藤原氏は親通が下総守在任中、相馬御厨と立花郷(のちの東庄)を公田官物の未進を理由に千葉氏から没収しており、これは下総の太平洋岸から香取海・常陸川水系の要所を手中に収めようとする意図に基づくものであったのだろう。

摂関家に祇候していた下総藤原氏は、香取社・鹿島社にも影響力を行使し得たであろうし、永万二年(一一六六)に藤原基実が死んだ後、平家が地方における摂関家領の実質的な支配を担うようになると、この地域において、いよいよその支配力を強めたものと思われる。

12

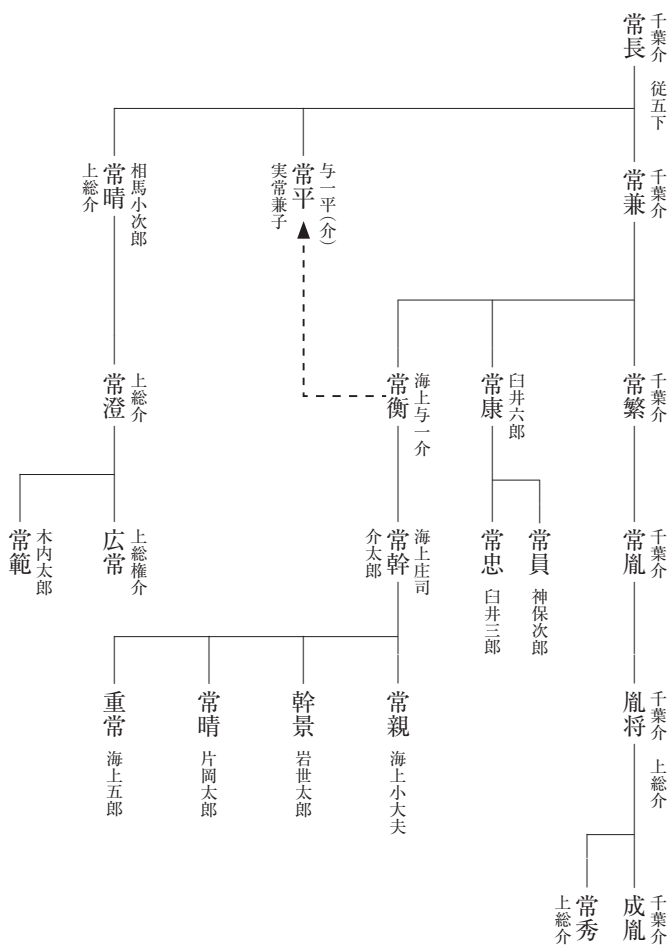
もまとめられる。⁽⁶⁾

治承・寿永内乱の頃、この一族で最有力の地位にあったのが、源義経の郎等となったことで知られる片岡八郎常春である。彼は三崎庄を押さえながら、常陸国に進出して鹿島郡片岡を名字地とし、常陸国北部を支配する佐竹氏（常陸源氏）と姻戚関係を結んでいた。⁽⁷⁾

常陸の佐竹氏との関係という点から注目されるのが、中世前期以前の記述についての信頼度の高い『神代本千葉系図』に片岡常晴（常春）の兄弟として「岩世太郎幹景」なる者が見えることである。『吾妻鏡』に、治承四年（一一八〇）、富士川の合戦で平家を破った源頼朝が踵を返して佐竹氏を討った後、生け捕りになった佐竹氏の家人が頼朝に対して、「源氏一族が結束して平家追討を行うべきなのに、なぜ同族であるわが主人を敵にしたのか、そんなことで誰があなたの子孫を守護するというのか」と述べ、これに感じた頼朝が、この者を御家人に加えた。そして、その者の名は「岩瀬与一太郎」といったというエピソードが記されている（治承四年十一月八日条）。彼こそ「岩世太郎幹景」その人なのではないだろうか。常陸国には岩瀬という地名がのこる。下総からは離れているが、香取海の水路で繋がっている、兄弟の常春が佐竹氏の縁者で鹿島郡に進出しているのなら、常陸平氏の通字を名に付している幹景も同様に常陸国に進出し、佐竹氏の家人化した蓋然性は高い。「与一太郎」という輩号も、祖父が「与一」で自身が「太郎」であるから整合するのではないか。かつて私はそう考えた。⁽⁸⁾

しかし、この推測は高橋修氏によって誤りであることが明らかにされた。すなわち、この岩瀬氏は秀郷流藤原氏首藤氏系で中世の久慈西郡岩瀬郷を本拠とする存在だったのである。⁽⁹⁾ただし、高橋氏はこの岩瀬氏を常陸に河内源氏が進出する以前からの在来勢力と見ているようだが、十一世紀半ば以降、北坂東に進出した河内源氏が、義家以来、首藤氏・大中臣氏など直属の郎等を下野・常陸に配置している事実を踏まえるならば、その一例として評価さ

系図 4 海上氏系岩世氏系図（『神代本千葉系図』による）



れるべきなのかも知れない⁽¹⁰⁾。また、これによって両総平氏系の岩世氏の存在が否定されたわけではないし、片岡氏の存在形態に明らかのように海上氏一族の常陸進出の事実、そしてそれが香取海を媒介とするものであったという事実は揺るぎようがあるまい。

なお、海上庄の西に位置し、香取海に北面する木内郷（応保二年（一一六二）以後、摂関家領荘園となる）には両総平氏の族長上総権介広常の兄弟の常範（木内太郎）があったが、同郷内には香取神領として田一町畠一町、また広常とその郎従の立券した五段の畠が所在していたことが知られる（『平安遺文』三三三三三三号）。広常は治承年中（一二七七～八一）、鹿島神宮の大欄宜が在京している間にその所領を同神宮の物忌（字袈婆子という女性神官）と結託して略取するという事件を引き起こしており（『鎌倉遺文』五七二三号）、常陸への志向はここにもうかがうことが出来るのである。

注

- (1) 拙稿「豪族的武士団の成立」（元木泰雄編『日本の時代史7 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年）、湯山学「相模国愛甲郡の庄園」（『地方史研究』第二六巻六号、一九七六年）。
- (2) 菱沼勇・梅田義彦『房総の古社』二三八頁所引。
- (3) 山本直彦「十二世紀末期（治承―建久年間）下総国の公領と庄園について」（『房総史学』一八号、一九七八年）。
- (4) 拙稿「十二世紀における東国留住貴族と在地勢力―「下総藤原氏」覚書―」（拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八八年）。
- (5) 拙稿「十一～十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題」（拙著『中世東国武士団の研究』、初出一九九〇年）。

- (6) 拙稿「十二世紀における東国留住貴族と在地勢力―「下総藤原氏」覚書―」。
- (7) 拙稿「京を守る義経―院近臣の「英雄」―(拙著『武門源氏の血脈』中央公論新社、二〇一二年)。
- (8) 拙稿「稲荷社を造営した二人の東国武士」(『朱』第四三号、二〇〇〇年)。
- (9) 高橋修「佐竹家人」岩瀬与一太郎考―その本領と出自をめぐって―(『常陸大宮市史研究』第三号、二〇二〇年)。
- (10) 拙稿「藤原秀郷と秀郷流武士団の成立」(江田郁夫・簗瀬大輔編『中世の北関東と京都』高志書院、二〇二〇年)・同「宇都宮氏の成立と河内源氏―下野の武士団と京都権門」(江田郁夫編『中世宇都宮氏 一族の展開と信仰・文芸』戎光祥出版、二〇二〇年)。

三、鎌倉幕府の成立と諸勢力の展開

(一) 上総・広常の滅亡と上総千葉氏の成立

十二世紀に房総半島東海岸が政治的にも文化的にも重要な機能を担ったことを直截に示すのは、両総平氏の族長として、坂東最大の武士団を統率した上総・広常が、その本拠を国府の所在する武総内海(現、東京湾)側の市原郡ではなく、太平洋側の玉崎庄(上西門院領)に置いていたという事実である。広常の居館は太平洋に河口を開く一宮川をやや遡った地点で合流する埴生川の河岸に位置する大柳館に比定され(長生郡睦沢町北山田周辺)、この館は寿永二年(一一八三)末に広常が肅清され、その大半の遺領とともに千葉常秀(上総千葉氏)に継承されている。おそらく、当時の一宮川河口には巨大な潟湖(ラグーン)が存在し、玉崎庄をはじめとする一宮川水系一帯の外港の機能を果たしていたのであろう。河口の目前には国一宮玉前神社が鎮座し、都市的な景観が形成されていたもの



地図3 12世紀末の上総国

と思われる。

当地方において、この時代の高い文化水準を物語る遺産として妙楽寺の木造大日如来坐像(国指定重要文化財)をあげることができる。妙楽寺は玉前神社(長生郡一宮町)から南西約一〇キロの地点に所在する天台宗の寺院で、山号は東岳山、寺伝によると嘉承二年(八四九)慈覚大師によって開かれ、はじめは叡泰(永代)寺と号したという。注目されるの高倉天皇の時代に平重盛が再興したという所伝が大日如来の造像推定時期と符合する点で、まさに在地において上総広常が全盛を誇っていた頃と重なる。像高は二・七九メートル、檜材の寄木造である。①このような巨大な仏像を本尊に据えた寺院は、上総氏の勢力規模から類推してかなり壮大なものであったと思われる、大柳館跡とともに考古学的な調査が期待される場所である。

この大日如来像には造像主を記した胎内銘はないが、それが遺されているのが、近年、「房総最古の年紀の明らかな在銘像」として紹介された横芝光町宮川の薬王院

（金色山福秀寺）所蔵の木造薬師如来立像（県指定重要文化財）で、像高一六二・二センチメートル、櫃とみられる材による一本割矧ぎ造りの等身立像である。銘文には「大檀主平常秀平代（氏）」とあり、「承久元年」の年紀が記されている。⁽²⁾

祖父常胤を介して両総平氏族長の地位を継承した千葉常秀は、下総国では埴生庄などを所領としていた。福秀寺は中世の匝瑳南条庄域に属しており、その点が問題となるが、常秀が頼朝拳兵以前から上総北部の山辺北郡堺郷を名字地としており、本像の造立された頃には、武射南郷も所領に加えていたことから、両総国境、太平洋に向かって南流する栗山川の東岸砂州上の微高地に立地するこの寺に遺存する本像の「大檀主平常秀」は、千葉常秀に同定してまず間違いなく、その銘文の下に記された「平氏」は彼の妻室と考えてよいであろう。

なお、横芝光町には辻観音院阿弥陀如来坐像など、中世黎明期から前期にかけて造立された仏像が多く遺されており、中世、この地域で活発な人間活動のあったことを示すものとして評価されている。⁽³⁾

（二）千葉介家（下総千葉氏）の千田庄獲得

治承四年九月十七日、平家打倒の挙兵後わずか一ヶ月で房総半島を制圧した源頼朝は、下総国府で以仁王令旨に基づく論功行賞を行い、藤原親政の旧領千田庄を謀叛人所帶跡として没官し、千葉常胤に与えた。この後、千田庄は千葉介家（千葉氏嫡流）に、本拠地である千葉庄に次ぐ重要な所領として継承されていくこととなる。その結果、在地にあった両総平氏系の原氏・金原氏・岩部氏・次浦氏などは千葉氏の被官化する。

その原氏を出自として東アジア規模の活動を見せたのが了行である。彼は千葉庄の千葉寺で学び、上洛して九条家に仕え、渡宋して一切経などの経典を将来した後、九条堂を管掌して僧位の最上位である法印に昇り、千葉介の

《下總千葉氏》



〔中条家文書「桓武平氏諸流系図」・「神代本千葉系図」・「千葉大系図」等による〕

閑院内裏造宮を差配するなどの活躍を見せたものの、建長の政変の首謀者として処刑されるに至るという波乱の人生を送ったのだが、その彼を育んだ文化的環境は千田庄に用意されていたのであろう。⁽⁴⁾

これらの事実を踏まえると、この千田庄は潟湖（ラグーン）としての椿海が港湾機能を有し、栗山川水系を経由して、北は常総内海（香取海）、南は太平洋に通じる、畿内―紀伊半島―伊豆―房総半島東海岸―陸奥という広域的なネットワークの結節点としての位置を占めたことを想定することが出来る。⁽⁵⁾

金澤文庫文書からは千田庄の仏教文化の興隆の様子を垣間見ることが出来、坂東における政治・経済・文化の先進地域の一つとして評価できるものがあるが、おそらくそれ以前から、当該地方にはその前提となる文化環境が整えられていたのであろう。

(三) 匝瑳南条庄地頭椎名氏

熊野山領匝瑳南条庄となった椎名氏の初代は胤光という人物で、出家後は「宝蓮」と称したことが確実な史料から確認できる。しかし、その系譜的位置については千葉常重の弟（六郎）なのか子（五郎）なのか諸系図一様ではない。しかし、その活動時期と、諱に「胤」の字を用いていること、それに常重の弟とするのが近世成立の『千葉大系図』であるのに対して、子とするのが中世成立の『神代本千葉系図』・『桓武平氏諸流系図』であることからみても、常胤の弟とするのが順当であろう。鎌倉政権成立以前は、その名字地である千葉庄椎名郷に本拠を置いていたが、下総藤原氏か上総氏の滅亡によって匝瑳南条庄の地頭に補され、この地に本拠を移したものとみられる。下総の椎名氏について知るところは殆ど旧稿の域を出ないが、⁽⁶⁾新たな知見から注目されるのは、おそらく木曾義仲・平家追討の軍功によって椎名五郎入道（胤光であろう）が、元久二年（一二〇五）五月、春日社領阿波国富田庄津

田島の地頭職に補任されていることである（『鎌倉遺文』一五四三号）。

『千葉大系図』には、先に見た両総平氏系の匝瑳常広の子の一人として宗光をあげ、彼は安元年中（一一七五～七七）に紀州湯浅庄司宗重の養子となり、宗光の子宗行が紀州湯浅氏を継ぎ、その弟の宗景が紀伊熊野山領匝瑳南庄（南条庄所）の地頭になったと記している。旧稿では、これを否定しつつも、中世の下総に「湯浅氏」の活動が見えることも指摘しておいた。それにしても、なぜ、湯浅氏が下総に進出し、匝瑳南条庄との関係でそれが説明されるような伝承が生じたのか。紀州に下総椎名氏と関わるような史料の所見はないが、阿波国富田庄と湯浅氏の本拠である紀伊国湯浅庄は紀伊水道を挟む対岸の関係にあつて近い。しかも、最近、綿貫友子氏がこの両岸の地域が一つの経済圏や流通圏を構成していたことを指摘されている^⑦。椎名氏が津田島の地頭に起用された背景には、すでに匝瑳南条庄と湯浅氏が関係をもっていたか、或いは椎名氏が津田島の地頭に補されたことを契機として、湯浅氏が匝瑳南条庄と関わりを持つようになったという事実があつたのか決めたいが、房総半島の太平洋岸の地域と紀伊半島や四国との交流を反映した問題であることは間違いないのである。

また、戦国時代に越中国で活発な動きを見せる椎名氏についても考察の対象を広げたいところであるが、ここでは関連文献として旧稿の補注で紹介したものに加えて、矢田俊文「戦国期北陸の本願寺と領主」（小林昌二監修『日本海域歴史大系』第三巻、清文堂出版、二〇〇五年）をあげるにとどめておきたい。

注

- （1）『日本歴史地名大系第二二巻 千葉県の地名』、千葉県教育委員会編『千葉県の文化財』（千葉県文化財センター、一九八〇年）。

(2) 武笠朗「房総の仏像―鎌倉・南北朝期の造像を中心に―」・濱名徳順「房総の薬師如来像とその信仰」・佐々木守俊「作品解説 36 薬師如来立像」(いずれも千葉市美術館編『仏像半島―房総の美しい仏たち』千葉市美術館・美術館連絡協議会、二〇一三年)。

(3) 道澤明「房総東部栗山川流域の中世世界―横芝光町の遺跡・集落等の検討から―」。

(4) 拙稿「了行の周辺」(『東方学報』第七三号、二〇〇一年)・「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元」(『鎌倉遺文研究』第二五号、二〇一〇年)・「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二四号、二〇一一年)。

(5) 遠山成一「両総国境に分布する城館跡について」(『千葉城郭研究』第三号、一九九四年)・「戦国後期下総における陸上交通について」(『千葉史学』第二四号、一九九四年)・「中世房総水運史に関する一考察」(『千葉城郭研究』第四号、一九九六年)・「印旛沼周辺のフナト地名に関する覚書」(『印旛沼―自然と文化』第四号、一九九七年)・「建武期千田庄動乱の再検討」(『千葉史学』第三三号、一九九八年)、鈴木沙織「東禅寺から香取海へ―中世のみち探訪―」(『青山史学』第三二号、二〇一三年)。

(6) 拙稿「下総国匝瑳南条庄地頭椎名氏について」(拙著『中世東国武士団の研究』、初出一九七七年)。

(7) 綿貫友子「紀伊水道内海世界の物流と交流」(中世都市研究会編『港津と権力』山川出版社、二〇一九年)。

むすびにかえて―これからの課題と方法

以上、中世前期を対象にして、房総半島太平洋岸地域の在地勢力について、この一年間に蓄積してきた研究成果

のエッセンスを土台に、若干の新知見やかつての私見に対する批判への回答を加えながら述べさせて頂いた。本来ならば、これを常総内海（香取海）から筑波山麓、さらには宇都宮氏の文化圏との接合する空間までを視野に入れて考察の対象とし、千葉氏一族の木内氏と小山氏一族の結城山川氏の関係など、具体的問題にも取り組んでみたかったのである。

山川氏については、木内氏が承久の乱の恩賞として得た大和国宇野庄の地頭代をつとめたことや、香取海周辺のテリトリーを木内氏と共有していることなどについて検討を加える必要も感じている。

ちなみに、木内氏については、同氏出身の渡元僧道源をテーマにした拙論の中で、潮来長勝寺にある梵鐘の銘文に大施主として見える「下総五郎禪門道暁」をその一族とする説に従ったが、それは誤りで、山川光義に比定された市村高男氏の指摘が正しい。⁽³⁾ かつて市村氏も常総内海地域の特性を日本列島全体の中に位置づける試みを進めて、文化面における常陸南部と下総との密接な交流を論じておられるから、その成果も反芻・吸収させて頂かなければならない。⁽⁴⁾

また、鎌倉幕府成立後、摂関家領下総国海上庄の地頭となった東氏系海上氏については、小笠原長和氏の研究をベースに、横田光雄氏による荘園領主との関わりや水運における海上潟に対する考察などを参看しながら再評価を加える必要が認められよう。⁽⁵⁾

海上氏の文化環境については、歌人を輩出した東氏の一族であるということのほかに、千葉県立中央博物館に実寸大のレプリカの展示されている銚子市常世田常燈寺の木造薬師如来坐像（国重要文化財）がよく知られている。本像の胎内に墨書された仁治四年（一二四三）の修理銘に見える「平胤方」が東胤頼（千葉常胤の六男）の孫の海上次郎胤方に同定されるからである。ただし、胤方は修理に関わったのであり、この像が定朝様式であることから

すると、造像者は前代の両総平氏系海上氏であった可能性を想定できよう。

房総半島太平洋岸と陸奥方面との関係については、奥州合戦の恩賞として千葉常胤が陸奥南部の太平洋岸に集中して所領を獲得していることなど、さらに追究すべき課題が残されている。一方、伊豆半島との関係については国守補任のあり方からも安房国と密接な繋がりが指摘できることを論じたことがあるが、これをさらに畿内・西国までを射程に入れて考えてみたい。古代の太平洋交通を対象にした川尻秋生氏の研究や、最近、新たな視点から伊勢平氏の成立について常陸と伊勢との海上交通路の存在を前提に論じられた野中哲照氏の研究からも学べきところが多い。⁽⁹⁾

なお、研究の方法としては、仏像の胎内銘・納入文書から得られる情報は貴重でありながら、これまで多くが見落とされていたように思われる。考古学のみならず美術史学との連繋の必要を痛感する次第である。

以上、新型コロナウイルス禍によって、テーマの定まった論文に替えて、焦点は定まらないながら、昨年度の研究の過程で得た様々な知見を加えて、中世前期に至る房総半島太平洋岸の在地勢力の文化環境と、その背後にあった太平洋―香取海の交通について述べさせて頂いた。後考のための覚書として御海容を願うばかりである。

注

(1) 村石正行「千葉一族の西遷と大和国宇野荘―『鎌倉遺文』未収『信濃国佐久郡長念寺阿弥陀如来立像胎内文書』から―」(『年報 三田中世史研究』一〇、二〇〇三年)。

(2) 拙稿「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」。

(3) 市村高男「鎌倉末期の下総山川氏と得宗権力―二つの長勝寺梵鐘が結ぶ関東と津軽の歴史―」(『弘前大学 国史研究』第

一〇〇号、一九九六年」。

- (4) 市村高男「中世常総の内海（入海）と地域社会」（中央学院大学比較文化研究所『紀要』第一一号、一九九七年）。
- (5) 小笠原長和「下総三崎荘の古寺と海上千葉氏」（『中世房総の政治と文化』吉川弘文館、一九八五年、初出は一九六九年）。
- (6) 横田光雄「九条家領下総国三崎荘について」（拙編『千葉氏の研究』名著出版、二〇〇〇年、初出は一九九二年）。
- (7) 拙稿「中世成立期の安房国―源頼朝上陸の背景―」（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第三〇号、二〇一七年）。
- (8) 川尻秋生「古代東国の外洋交通」・「古代東国の沿岸交通―中世との接点を求めて―」（『千葉県立中央博物館研究報告―人文科学―』第五卷第二号、一九九八年）。

(9) 野中哲照「伊勢平氏〈あとずさり定着論〉―社会構造の変質と武士団の成長―」（『古典遺産』六九号、二〇二〇年）。

〈キーワード〉

房総半島 武士 海上交通